



Title	『生命の水』におけるアーザードのソース評価について
Author(s)	松村, 耕光
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2010, 3, p. 29-36
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/12804">https://hdl.handle.net/11094/12804</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 『生命の水』におけるアーザードのソーズ評価について

松村 耕光

MATSUMURA Takamitsu

Abstract:

### Āzād's Appraisal of Mīr Sōz in *Āb-e Ḥayāt* (The Water of Eternal Life)

Muḥammad Ḥusain Āzād's *magnum opus*, *Āb-e Ḥayāt* (The Water of Eternal Life), published in Lahore in 1880, consists of two parts; the introduction and the main part which deals with major Urdū poets' life and works.

This paper tries to see how Āzād evaluates Mīr Sōz, a famous Urdū poet of the eighteenth century, in order to understand his way of evaluating poets in the main part. The section of Mīr Sōz contains Āzād's important remarks on Urdū poetry, although it is relatively short.

Āzād praises Mīr Sōz, even calling him the Sa'dī of Urdū *ghazal* because the *ghazals* of Mīr Sōz were lucid, being free from artificial literary devices. This appraisal is understandable because Āzād criticizes artificial Urdū poetry here and there in *Āb-e Ḥayāt*, especially in its introduction.

Although Āzād praises Mīr Sōz, he does not think his *ghazals* have high literary merits. According to Āzād, without "*mazmūn* (= contents)" *ghazals* cannot attain high literary merits. Āzād thinks that lucidity is necessary in poetry, but that mere lucidity does not bring high literary merits.

It is not appropriate to consider that *Āb-e Ḥayāt* is a book of nostalgia and that Āzād wrote this book simply to pay homage to great Mughal Urdū poets. As the section of Mīr Sōz clearly shows, Āzād not only praises poets but evaluates them according to his peculiar view on Urdū poetry.

Keywords : Muḥammad Ḥusain Āzād, *Āb-e Ḥayāt*, Urdu poetry

キーワード：ムハンマド・フサイン・アーザード、『生命の水』、ウルドゥー詩

## 1. はじめに

アーザードの著『生命の水』（*Āb-e Ḥayāt* 初版1880年、第2版1883年、第3版1887年）は序論と本論の二部構成になっており、本論ではワリー（Walī）からムガル朝末期までの代表的なウルドゥー詩人が5期に時期区分されて紹介・論評されている。<sup>1</sup>

『生命の水』本論に収められた詩人論に関するこれまでの研究の関心は、アーザードが典拠として用いた文献は何か、歴史的事実と相違しているのか、いないのか、という点に向けられており、アーザードが如何なる視点から詩人たちを評価しているのか、『生命の水』の序論および本論の各時期の冒頭に置かれた序文で展開されているウルドゥー語・ウルドゥー詩改革論と詩人論とは如何なる関係があるのか、という関心からの研究は必ずしも十分に行われているとは思われない。本稿では、短いながらも、アーザードの興味深い評言が見られる、詩人ミール・ソーズ（Mīr Sōz）の項を検討し、アーザードがどのようにこの詩人を評価しているのか確認してみたいと思う。

## 2. アーザードのソーズ論

アーザードは、次のようにソーズの項を始めている。

「ソーズは雅号、本名はサイイド・ムハンマド・ミール（Sayyid Muḥammad Mīr）、ミール・タキー（Mīr Taqī 大詩人ミールのこと）が四分の一の詩人（pāo shā'ir）と見做した人物である。<sup>2</sup> デリー旧市街のカラーワルプラー（Qarāwalpūrah）という地区に住んでいたが、祖先の故郷はブハーラーである。彼の父サイイド・ズィヤーウッディーン（Sayyid Ziyā-ud-Dīn）は非常に尊敬すべき人物であった。弓術の達人として有名で、ハズラット・クトゥベ・アーラム・グジャラーティー（Ḥazrat Quṭb-e 'Ālam Gujārātī）の子孫であった。<sup>3</sup>」

- 1 本論の各詩人の項は、基本的には、詩人の略伝、人物紹介（逸話紹介）、著作紹介、詩の評価、詩句例で構成されているが、詳しい項もあれば簡単に済まされている項もあり、一様ではない。
- 2 アーザードは、次のような出典不詳の逸話をミールの項で紹介している。「ラクナウーで或る者が（ミールに）聞いた、『当代にはどういう詩人がいるのでしょうか』。ミールは答えた、『ソウダー、それに私』。そしてしばらく考えてから言った、『ダルドは二分の一の詩人だ』。或る者が尋ねた、『ミール・ソーズはどうでしょうか』。眉根を寄せてミールは言った、『ミール・ソーズも詩人なのかね』。『（アワド）太守アーサフドウラーの詩の師匠ですが…』。『では、詩人だということにして、詩人は全部で二人と四分の三人だ。しかし、名家出身者の中にそのような雅号は聞いたことがない』。」（p. 208）
- 3 このあとアーザードは、次のような項目を立ててソーズの項を執筆している。  
雅号を変更したこと。  
詩風。  
デリーとの別れ。  
書の見事な腕前。  
馬術と弓術。  
ダーグ（Dāgh）という名の息子がいたこと。  
明快な言葉。  
基本的にガザル（ghazal）しか作らなかったこと。

(pp. 184-185. 引用は、1982年にラクナウーのUttar Pradesh Urdu Academyより出版された版より行う。これは、1883年に出版された『生命の水』第2版に基づいている。<sup>4</sup>尚、引用文中の括弧内は引用者による註記である。)

ソーズは、ミール (Mīr Taqī Mīr c.1722-1810) やソウダー (Saudā 1713?-1781) のような大詩人とほぼ同時代に生きたデリー生まれの詩人である。<sup>5</sup> 初めはミールという雅号であったが、大詩人ミール・タキー・ミールの雅号ミールと紛らわしいので、ソーズという雅号を用いるようになったと言われている。<sup>6</sup>

ムガル朝に雇用されていたが、ムガル皇帝アフマド・シャー (Aḥmad Shāh) が1754年に帝位を追われたあとソーズはデリーを離れ、ファッルハーバード (Farrukhābād) のナワブ・ミフルバーン・ハーン・リンド (Nawāb Mihrbān Khān Rind) の詩の師匠となった。その後、ラクナウーのアワド太守アーサフドウラー (Āṣaf-ud-Daulah 1797年没) の詩の師匠となり、ラクナウーでヒジュラ暦1213年 (西暦1798/99年) に没した。

ソーズは、『生命の水』の5期に分けられたウルドゥー古典詩の時期区分の第3期に配されているが、頁はあまり割かれていない。Uttar Pradesh Urdu Academy版で、ソーズと同じくウルドゥー古典詩の第3期に属する大詩人ミールやソウダーには、それぞれ194頁から220頁までの27頁、141頁から172頁までの32頁が割かれているのに対し、ソーズが扱われているのは、184頁から193頁までの10頁である。<sup>7</sup> このように頁数の面ではソーズは大きく扱われていないが、興味深いことに、アーザードは、次のように、ソーズの詩 (ガザル) を非常に高く評価している。

---

ガザルの真の形態。  
ソーズの詩とミールやソウダーの詩の比較。  
彼のガザルの形態について。  
第二の特徴。  
彼の詩集の厚さ。  
ソウダーとの逸話。  
雅号に関する逸話。  
朗唱の仕方。

4 アブラール・アブドゥッサラームの校訂版 [Muḥammad Ḥusain Āzād 2006] も参照したが、大きな異同は見られなかった。

5 生年に関しては、1733年の生まれとする説 [Waqār 'Azīm, ed., 1971: 205] や1721年、1730/1731年の生まれとする説 [Irtizā Karīm, ed., 1991: 8] があり、はっきりとしない。

6 ジャーリビーによれば、1752-1755年頃のことである [Jamīl Jālibī 1987: 793]。

7 第3期は以下のような構成になっている。  
序文 (pp. 123-130)  
マズハル (Mazhar) (pp. 130-132, 134-140)  
ターバーン (Tābān) (pp. 132-134, 140-141)  
ソウダー (pp. 141-172)  
ザーヒク (Zāḥik) (pp. 172-175)  
ダルド (pp. 175-184)  
ソーズ (pp. 184-193)  
ミール (pp. 194-220)  
結語 (p. 220)

「ソーズの美しい表現は、気どりや人工的な技巧によって全く汚されていない。緑の小枝に杯のような形になって咲き出した薔薇、深い緑色の葉の中で水々しい魅力を見せる薔薇の美しさのようなものである。洞察力のある目を授けられた人々は、人工的な技巧のいくつもの飾りが、たった一つの生まれつきの美しさにその身を捧げることを知っている。」(p. 186)

「ソーズは平易な内容で詩作したが、形式も平易であった。大抵の場合、反復語句 (radif) を用いず、脚韻 (qāfiyah) だけで満足していた。ソーズの詩は慣用表現の面白味のみには依拠している。ペルシア語の連語法、直喩、隠喩、ペルシア語系の単語を用いた合成語はソーズの詩にはほとんど見られない。このような点からソーズをウルドゥー・ガザルのサアディー (Sa'dī) と呼ぶべきである。<sup>8</sup>」(p. 187)

『生命の水』序論および本論の各時期の冒頭に置かれた序文から解るように、<sup>9</sup> アーザードは技巧を過度に用いると自然な美しさが損なわれると考えており、アーザードには、技巧を弄さないソーズの詩は非常に好ましいものに思われたのであった。

ソーズがガザルの中で用いている、ペルシア語的な要素をほとんど持たない言葉は、アーザードによって「きわめて甘美な言葉」(p. 186) と称賛されている。それは、アーザードによれば、話し言葉であり、ガザルの本質に合致した言葉であった。<sup>10</sup>

「ガザルという言葉は、女性と話すことを意味している。文芸用語としては、求愛者が愛しい人から離れているときや一緒にいるときの自分の思いを敷衍して表現することによって、心の願いを満たし、哀しみを消すことを意味している。使用されるのは、二人の人が坐って話をしているかのような言葉であり、まさにこれこそがミール・ソーズの詩なのである。」(pp. 186-187)

「ソーズの詩は、まるで求愛者が愛する人と坐って話をしているかのようなものである。ソーズは、詩句を整えるために単語を前後に移動することすらよくないことだと思って愛の言葉を詩にしていた。」(p. 187)

8 アーザードは著書『ペルシアの詩人 (Sukhandān-e Fārs)』の中で、古典ペルシア詩の歴史を4期に分け、サアディーを第3期に配し、サアディーはこの時期の甘美な詩人であり、詩であれ、散文であれ、話をしているかのようなものである、直喩も用いているが、意味を難解にはしていない、直喩は明解であり、詩の味わいを増している、と述べている [Muhammad Ḥusain Āzād 1979 : 308. 原著は1907年にラホールで出版された]。

9 [松村耕光 2005], [松村耕光 2009] を参照。

10 ソーズの言葉遣いに関してジャーリビーはこう述べている。「ソーズの詩は、このミールとソウダーの時代に純粋なウルドゥー語 (khālis Urdū zabān) で作られたもので、ペルシア語的要素 (Fārsiyat) が非常に少なく、ウルドゥー語らしさ (Urdū-pan) が顕著である。」 [Jamil Jālibī 1987:799] タバッサムによれば、ソーズそしてダルドの弟アサル (Athar) が用いた言葉は、「デリーの街角で話され、広く用いられていた標準的な会話の言葉であった。この言葉には、文学の規範が重くのしかかっていなかったし、技巧の影響もなかった。それは直接的な表現のための言葉であり、数世紀にわたってこの言葉の外内面を育ててきた文化の味わいをその内部に持った言葉であった。」 [Tabassum Kāshmirī 2003 : 361]

このようにソーズのガザルを高く評価するアーザードは、平易な言葉、平易な内容で詩作すべきであると読者に次のように訴えている。

「もしこのような形で言語 (=ウルドゥー語) が存続していたなら、ペルシア語の絢爛たる詩想が入って来ていなかったなら、表現する力がもっと残っていたなら、今日、我々はこれほどの問題に直面することはなかったであろう。今、二つの問題がある。第1の問題は、華麗な隠喩や誇張された詩想がまるで口癖であるかのように言葉にとりついてしまったことである。この習慣は除去しなければならない。そして新しい様式や平易な詩想を取り入れなければならない。長い間、このような詩を作り、このような詩を耳にしてきたので、詩人の口や聞き手の耳はこのような様式に慣れてしまっており、平易に言葉を味わい深く用いることができず、聞き手に感銘を与えることができないのである。」(pp. 187-188)

アーザードによれば、ウルドゥー詩においてソーズのような詩が作られなくなったのは、ミールやソウダー、特にソウダーの影響である。

「ミールも時折ソーズに近くなるが、大きな違いがある。ミールも見事に慣用表現を使いこなすが、ミールはペルシア語を多く用いているし、内容を高尚なものにしている。ソウダーはこういうことから遠く離れている。ソウダーは、詩題を比喩で染め上げ、慣用表現の中に嵌め込み、その詩才によって言葉を前後に移動させている。その配列の見事さは、見ればすぐに納得できる。」(p. 187)

「ソウダーが主として—ミールも幾分か—この(平易な)詩風を変化させた。比喩をインドの慣用表現と混ぜ合わせ、堅牢なレーフタ (Rēkhtah-e matīn) を作り上げたのである。<sup>11)</sup>」(p. 188)

面白いことにアーザードは、ミールを論じた項で、ソーズとミールのガザルを比較して、

11 ソウダーの言葉遣いについてアーザードは、ソウダーの項で次のように述べている。  
 「ウルドゥー語を磨き上げた者の中でソウダーは抜きん出ている。ソウダーは、優れた化学者が一つの物質を他の物質と混合して、いかなる酸もその結合を分離することができないような第三の物質を創り出すように、ペルシア語の慣用表現をパーシャー (bhāshā) に導入し、混合した。ソウダーはペルシア語の慣用表現や比喩によってインドの言葉 (Hindī zabān) に非常に大きな力を付与した。」(p. 150)  
 興味深いことにアーザードは、ソーズのペルシア語的要素のほとんどない、平易な言葉遣いを称賛しているにもかかわらず、ソウダーの、ペルシア語的要素の多い言葉遣いをも次のように高く評価している。  
 「ソウダーは大変才能ある人物で、その繊細さによって、二つの言語から第三の言語が産み出された。その言語は広く受け入れられ、将来のインドの言語と認められた。その言語は支配者の宮廷や学芸の宝物庫を支配した。このことによって我々の言語は、優れた表現力と美しい表現様式を持っていることを保証するお墨付きを得て、文明諸語の宮廷で榮譽ある地位を得ることである。インドの人々は常にソウダーの偉大さの前に尊敬と感謝の首を垂れなければならない。」(p. 151)  
 ソウダーの創り出した言葉は、非常に素晴らしい言葉であるが、ガザルの言葉は話し言葉でなければならないので、ガザルには不向きである、とアーザードは考えていたように思われる。

ソーズのガザルは表面的であると否定的な見解を述べている。

「ミールの、明解で解りやすい詩は、その簡明さにおいて独特であり、(鑑賞する者に) 苦しみではなく、喜びを与える。だからそれは教養ある者に尊重され、一般の人々にも広く愛されているのである。実は、ミールはこの詩風をソーズから得たのである。しかし、ソーズの場合、それは表面的なものであるに過ぎない。ミールは実のある内容 (mazmūn) を詩に導入し、ありふれた言葉 (gharēlū zabān) に高い格調 (matānat) を与え、それを詩会にふさわしいものとしたのである。」(p. 198)

アーザードは、言葉や内容の平易さと文学的な価値とを分けて考え、平易なソーズのガザルを非常に高く評価しつつも、その文学的価値は低いと見做したのである。<sup>12</sup>

参考までにアーザードが詩句例として『生命の水』に収録しているソーズのガザルを二篇訳しておく。

命が消えるよ ああ友よ 助けておくれ  
心に棘が刺さったよ さあ抜いておくれ  
楽しくもない人生だ  
さあ殺しておくれ  
お願いだから  
あの気取った人を呼び戻しておくれ  
あの人が怒って何か言ったとしても

12 ソーズのガザルの特徴に関して、ジャーリビーは次のように記している。  
「ソーズ詩集を読んで最初に思うことは、ソーズは、ミール、ソウダー、ダルド、カーイム (Qā'im) とは違う種類の詩人であるということである。ソーズの詩には、ミールやダルドに見られるような、意味の多重性や深さがなく、ソウダーに見られるような想像力もない。ミールやソウダーを時代を超える詩人にしたような個性もないのである。ソーズは基本的に確かにガザルの詩人である。その詩のテーマも恋である。しかし、その恋には、ミールやダルドの詩に個性的な色彩を与えている深さや経験がない。ソーズの視線は表面に向けられ、目の前にある事柄と自分の詩とを結びつけている。ソーズは外面の詩人であって、内面の詩人ではない。だから恋の有様はありふれた形でしか詩に現れないのである。彼の恋の経験は高尚でも低俗でもなく、恋のごくありふれた姿と呼べるような、一般的な姿を彼は詩の中で表現しているように思われるのである。」[Jamīl Jālibī 1987 : 796]  
ソーズのガザルには深さはないが、その「アダー・バンディー (adā-bandī)」を特徴とする詩風は、ラクナウの詩人たちに大きな影響を与えたとジャーリビーは指摘している。  
「ソーズはその詩風によってアダー・バンディーの傾向を生み出した。それはラクナウ精神の軽妙さ (chhōnchlē-pan) や文化状況に適合し、次の1世紀の間、さまざまな詩人の詩風の中に含まれることとなった。それは、ジャアファル・アリー・ハスラット (Ja'afar 'Alī Ḥasrat), ジュルアット (Jur'at), インシャー (Inshā), ランギーン (Raṅgīn) に始まり、ダーグ (Dāgh) にまで及んでいるのである。」[Jamīl Jālibī 1987 : 797]  
「アダー・バンディー」とは、恋人の魅力を言葉で具体的に表現することであるが、ジャーリビーによれば、「アダー・バンディーの詩は言葉中心の詩と直接的な関係があり、その中では愛しい人の魅力や恋の事象のあらゆる側面が表現される。ソーズの詩を読むと、まるで誰かが、楽しそうに、公然と、自分の恋や愛しい人について語っているようかのように思われるのである。」[Jamīl Jālibī 1987 : 798]

何も言い返してはいけないよ  
呼んでもあの人<sup>が</sup>来ないなら  
懇願して 懇願して 何とか連れてきておくれ  
あなたの僕<sup>しもべ</sup>が死にかけていると  
死の苦しみから救って欲しいと伝えておくれ  
焦がれる男のため息はとても恐ろしいものなのだ  
ソーズにはあなたの幸せを祈る言葉を言わせておくれ

心のせいでめちゃくちゃだ  
燃えて 焼けて 丸焼けだ  
涙はまったく途切れない  
心はひどい有様だ 中が溶けてしまったよ  
ずっと見ていたあの人を  
見るのはもはや夢の夢  
ああ 友が赤の他人になったとは  
何という時代の転変か  
人生の詩集を隈なく見たが  
半句一つも選べなかった  
ソーズは気を失ってしまったよ  
あなたのそばに行ってから

### 3. おわりに

以上、『生命の水』本論のソーズ論を検討し、アーザードが、ガザルは平易な言葉や内容で作られなければならないという文学観に基づいてソーズのガザルを高く評価していること、そして他方では、「実のある内容 (maẓmūn)」がなければ文学的な価値は低いという文学観に基づいてソーズのガザルを否定的に評価していることを確認した。『生命の水』本論の他の詩人論に関しても、それらを過去の偉大な詩人たちの詩業を称賛するために書かれたものと考えることなく、アーザードが、如何なる視点から詩人評価を行っているのか、仔細に検討しなければならないと思われる。

### 参照・引用文献

- 松村耕光, 2005年, 「『生命の水』序論に見られるアーザードのウルドゥー語・ウルドゥー詩改革論」, 『大阪外国語大学論集』, 第33号。  
——, 2009年, 「『生命の水』におけるウルドゥー古典詩の時期区分について」, 『大阪大学世界言語研究センター論集』, 第1号。

Irtizā Karīm, ed. 1991, *Intikhāb-e Kalām-e Mīr Sōz*, Urdu Academy, Delhi.  
Jamil Jālibī, 1987, *Tārīkh-e Adab-e Urdū*, vol. 2, Majlis-e Taraqqī-e Adab, Lahore.

- Muḥammad Ḥusain Āzād, 1880 [rep. 1982], *Āb-e Ḥayāt*, Lahore [rep. Uttar Pradesh Urdu Academy, Lucknow].
- , 2006, *Āb-e Ḥayāt*, edited by Abrār ‘Abd-us-Salām, Bahauddin Zakariya University, Multan.
- , 1907 [rep. 1979], *Sukḥandān-e Fārs*, Lahore [rep. Uttar Pradesh Urdu Academy, Lucknow].
- Tabassum Kāshmirī, 2003, *Urdū Adab kī Tārīkh: Ibtidā sē 1857 tak*, Sang-e Mīl Publications, Lahore.
- Waqār ‘Aẓīm, ed., 1971, *Tārīkh-e Adabiyāt-e Musalmānān-e Pākistān-o-Hind*, vol. 7, Panjab University, Lahore.

(2009. 12. 3 受理)